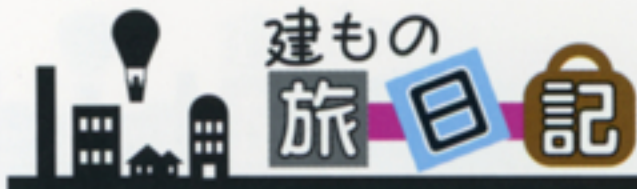




第2回



(社)日本建築家協会 沖縄副支部長

島田 潤 建築デザインネットワーク

アメリカ放浪記

建築家は旅が好きだ。それは、職業柄建築や



アリゾナのアーコサンティ

までも続く地平線や、夜の満天の星空、自然の雄大さを強烈に魅せられた。遠くで聞こえるコヨーテの吠声のおまけまでがついた。半年ほどアーコサンティに滞在した後、グレイハウンドのバスに乗ってアメリカ各地を旅した。夜行バ

スに乗って、朝目的の街に着き、昼間は建物や街を見て歩く。夕方になるとまた夜行バスに乗り込み、新しい街へ向かう。アリゾナ、コロラド、ニューメキシコ、テキサスとひたすら中西部の街と建築を観ながら東に向かった。そして、ようやくミシシッピ川の畔に辿り着いた。そこには、朝日を浴びて輝く巨大なステンレスのアーチが建っていた。エール・サーリネン設

— 広大さと歴史を体感した瞬間 —

計のゲートウェイアーチだ。ここから西部が始まるという記念に建てられたモニュメントである。三角形の断面をもつ高さ192メートルのアーチは頂部に行くにしたがって小さくなり、それが光を受けて軽やかに聳えていた。地下には、西部開拓博物館がある。西から東へと西部開拓史とは逆の方向でやって来た私にとっては、ようやく東部の入り口に到達した感慨があった。セントルイスの街だ。街の風景も一変したように思う。それまでの荒野に忽然と現れる街ではなく、煉瓦積みみの建物で街区が形成されたダウンタウンが2000年前のアメリカをイメージさせた。それは、アメリカの広大さと歴史を体感した瞬間だった。

(※掲載写真は著者提供)



セントルイスのゲートウェイアーチ

街に強い興味があるせいかもしれない。目的の建築や自然の中に身を置いて、五感で体感したいからだろう。気候、風土や街や建築を肌で感じるということだろう。スケール感や密度、素材感や空気感すべてを体感したくて旅をする。それは、ドラマチックな体験であり、癖になる。

私にとっての最初の大きな旅は、パウロソレリの主宰するアーコサンティの建設に参加するために、リュックを担いでアメリカに渡った時だった。今から30年も前のことだ。アーコサンティのあるアリゾナの砂漠では、どこ